

はじめに

中村隆之

「フランス語圏 (francophonie)」は、二十一世紀に入る頃には日本語ではいまだ馴染みの薄い表現だった。それから四半世紀が経った今、この表現は完全に定着した。フランス語で書かれる文学については、主に旧植民地の文学を念頭に置いた「フランス語圏文学」が現在では広く用いられている。

言うまでもなく、フランス語を話す地域は、フランス国内に限らない。そのこと自体はこの日本語圏のフランス関係者にも昔から広く知られる事実だった。しかし二十世紀中、文学の中心地はフランス国内だった。例えば、今ではよく知られるエメ・セゼールの名前は一九六〇年代の翻訳詩選集や詩誌のなかに見つけることはできる。しかし、その場合の多くは、フランス本土の文学受容を介したものであり、サルトルが序文を寄せた『ニグロ・マダガスカル新詩華集』(一九四八年)をモデルとした第三世界黒人詩人選のなかか、あるいは、シュルレアリスムの周縁として紹介されるばかりだった。セゼールの『帰郷ノート』(一九三九年)が『植民地主義論』(一九五〇年)とともに日本語で読めるようになるのは一九九七年を待たなければならなかった。

このように私たちの価値観をゆるやかに変え、やがてその認識を転換させるのは、きわめて重大な仕事だと言えるのではないだろうか。この意味で「フランス語圏文学」の普及に大きな貢献を果たし、この語を私たちに馴染みのあ

るものに変えた先達の一人である立花英裕（一九四九—二〇二一）の仕事は大切だ。

立花英裕はフランス語圏をめぐる文学と教育の双方の分野で幅広く活躍したことから、彼と同時代を生きた関係者においてその名を知らない人はほとんどいない。さらには彼の手がけた多くの訳書は関係者以外にも広く知られるところだ。けれども早稲田大学退職後に襲われた突然の病とその後に関病生活の末、突如旅立ってしまった立花には、自身の研究をまとめあげるような単著を準備する時間は残されていなかった。

そこで立花の同僚であった谷昌親とわたしは、フランス語圏を自在に旅してきた彼の文学研究の歩みをたどりながら、彼が残してくれた仕事への敬意を込めつつフランス語圏文学の今後を展望できるような内容の本を編むことができないかと検討を重ねてきた。そのようにしてできたのが本書である。

本書は、立花英裕の仕事に捧げられた谷昌親による導入的概説から始まる。続く二つのパートのうち、第一部では、立花の代表的な仕事を振り返っている。前述のとおり、立花にはフランス語教育の分野でも優れた業績がある。これについては本人が執筆した語学教科書でその一端を知れることや、彼の文学研究に焦点を当てるといふ編集方針から今回は割愛することにした。その上で、その文学研究の出発点となったロートレアモンからその後関心の重心を移したカリブ海やケベックの作家をめぐる論考などを集め、三つの問題群のもとにゆるやかに分類してみることにした。なかには問題群の設定や紙幅の関係上、再録を見合わせたものも、いくつもある。ともあれ立花の関心は幅広かったことから、その仕事をすでに知る方にも、これから知る方にも興味深いものになっているはずである。

第二部は、二〇二二年十一月二十六日に早稲田大学八号館B一〇七教室で開催されたシンポジウム「複数の世界文学に向けて——フランス語圏文学の遺産と未来」に基づく内容で構成されている。立花の仕事を振り返ることを隠された目的とした同シンポジウムで発表した、大辻都、澤田直、西川葉澄、廣田郷士、福島亮、星埜守之が、それぞれ読み応えのある論考を寄せてくれた。この六名は立花との親交をもってきた方々でもある。付言すれば第二部は、立花英裕編『クレオール想像力——ネグリチュードから群島的思考へ』（水声社、二〇二〇年）の続編のようなものだと思える。だと編者は捉えている。

本書の題名は『異邦人のフランス語圏文学』とした。「異邦人」を冠してみたのは、この名辞に内包される「異邦性」が立花英裕の研究と人柄を示すように常々思われてきたからだ（中村隆之「異邦性の感覚——立花英裕先生の人柄と研究をつなぐもの」、『人文論集』第五七号、早稲田大学法学会、二〇一九年三月、i—vi頁）。実際、立花にかぎらず、私たちは他者との関係において潜在的にはいつでも「異邦人」だ。国外を対象とする研究者は他者の文化に必然的に関わる以上、この異邦性の感覚をとりわけ身体化している。そのような視点からまなざされ、論じられるフランス語圏文学が題名の意味するところだ。

異邦人のフランス語圏文学は、確固とした同一性を揺るがすという意味で、常に複数的である。その複数性が可視化されるのは、まさしく複数の論者がフランス語圏文学のプリズムを多声的に照射する第Ⅱ部であるのは間違いない。けれども、立花個人を著者とする第Ⅰ部のなかにも、対象に応じて変容する著者の複数性が見出されるのみならず、本書に収録したいくつかのフランス語で書かれた彼の論考は、その日本語訳を担当した谷昌親の翻訳を介して何よりも二重化されている。

立花が実践してきた、確固とした同一性から絶えず逃れていく旅の歩み。本書は彼が見ることの叶わなかった未来の光景を私たちが分かち合うための読書という旅への誘いである。